協同のひろば

公的社会教育と協同の接点をさぐる

第36回社会教育研究全国集会報告

菊池　陽子（埼玉県／生活文化・地域協同研究会事務局長）

8月24～26日の3日間、浦和市（埼玉大学他）において開催されたこの集会は、毎年各地が実行委員会をつくり、社会教育推進全国協議会とともに主催する集会であって、埼玉の地での開催はこれで4回目となる。

前回（第22回）は入間地区の富士見市で行われ、都市近郊の農村地域を舞台に土臭く、熱っぽい集会で成功させた。その時の経験者が土台としてまだ生き残っている……という条件があったので、そう不安はなかったが、この間社会は大きく変化していて、構造的にそれらの枠組みの中で生き、くらす住民の社会教育によせる期待をどう集約できるのか、またこの場で表現しあうことをどう保障しあえるのかという質の違った不安は準備期間中なかなかぬぐうことができなかった。

今回、浦和市とはいっても「埼玉集会」とすることで町まち村むらを基盤とする「社会教育」関係者には全体像を捉えずらく、そうはいってもせっかくの機会、県内を網羅した教育文化の現況（水準）を表面化させる意味は重要であった。

折もおり、「公民館50年」という年にもあたり、戦後の公的社会教育を総括する意味ももった集会であった。

テーマは協同の原点とも

「いのちを育み、希望が語れるくらしと地域づくりを学び合いの力で」と決めたテーマ設定はキャッチコピーとしての「いのち輝く時代へ」とともに集会の三日間どの会合にも生きて存在した。

大田堯実行委員長（東大名誉教授）は数回の実行委員会のなかでパイプラインに身を委ねてしまうのではなく、人と人とのかかわり合いの中で新しいライフラインをどのように創りだしていくのかを考えていけるような集会にしようではないかと提起しつづけ、第一全体会では「いのちが輝くとは『人をあてにし、あてにされる関係』。さらにはいのちは関係しあっていきており、文化は弱いものをつなぎあわせるためにある」と社会教育の原点を述べた。また、社全協の島田修一委員長（中央大学教授）は「福祉、健康、環境などの民衆の学びの広がりは沖縄、原発、ＨＩＶ訴訟など時代を動かす力になっている。一方で自殺、リストラ、不登校など否定的な現象も強まっており、この悲劇にどうこたえるか。時代をひらく社会教育が問われている」と強調した。

活発に課題別セミナー・分科会が

4つのセミナー、24の分科会という少々小分けにすぎる感じの実践交流研究の場は、どこも満員の盛況。

「社会教育」という言葉自体あまり馴染みでない。が、1000人を越す人々が集まっていた。人々の営みのなかで『学ぶ』という営みは世の東西を問わず、昔からある。しかし、とりわけ日本ではお国のためのひとづくりの時代が長く続き、学ぶ主体が主人公となった学びは、新しい憲法ができ教育基本法の誕生以来であろう。

学校教育はすべての人が学ぶ権利を保障するため、義務教育制度が設けられた。しかし社会教育は義務ではなく、むしろ権利として誕生し、その主体の意思を地方自治体が条件整備し、保障しなくてはならないとした。

良心的な自治体（教育）職員たちは、住民・市民の学習権保障のためには自らがタテとなり、全国で奮闘してきた。そしてその事は教育の民主化と、学ぶ自由を守る上で歴史的な事実を記した。

がいっぽう、そうした責任感からか体質的には強固な保守となり、他のものをいれさせたくない、（むしろ排除とすらもいえる）目幅の狭い教育実践として発展せざるをえなかった。

だから社会教育法第23条の読取りかたも、公民館でのしてはいけない、させない禁止項目とうけとり、公的社会教育の現場に住民が近寄りづらい体質をきづいてしまったのではなかろうか。

そして穏やかそうで何事も受け入れそうな（行政職員好みの）住民のたまり場ともなりがちで、「職員」が関わらないと社会教育ではないと定義づけして、その職員による手作りの教育内容を住民が利用させてもらうというパターンが多くなり、うっかりすると教化ともいえる上から下への教育の場ともなり、現在、一般行政職の職員が人事異動により教育現場へまわって来ることがほとんどという現場の実態を考えれば、職員という人の質が大きな問題となってきている。

一般的にいえばこうした現状の中ではあるのに、凄い！、今集会に集まった面々。物ともせず、住民の学習要求とピッタリ組んでの各地の実践が交流されていた。そしてそのなかみは住民、職員、学生、研究者それぞれの属性をより認識し高めあっていくことのさらなる必要性だったであろう。

特筆すべきは、学生の就職の場の問題だ。ただでさえ就職難の時代、公務員をめざす学生が多い。しかし、社会教育を学びそれを専門として生きていきたい学生にとってそれをうけとめる受け皿はほとんどといって良いほどない。

つまり、学校の教員では一般行政に移るなどはまったくない話で教育専門家として学校が現場となる。しかし、社会教育現場に教育職として配置される市町村はほんの微々たるものでしかない。（専門職制が確立されていない）

今集会の中で学生が自分達でアピールをつくりひとつの課題別集会を用意した。これも民主的社会教育の運動史上歴史にのこる集会になったといって良い部分と言える。

と同時に、こういった情勢のなかで資本の論理でない非営利の団体が、とりわけ教育重視の原則をもつ協同組合労働とどう社会教育関連労働として連携していけるかは、もう一歩深めた研究がまたれるところであるとの認識を深くした。

急激に変化する社会の中で

矛盾の多い現代社会において老いも若きも今、学習なしにはくらしをきり拓けない時代となっている。

学校教育の「発展」にともない高学歴者も増え、学ぶということが、そうたいそうな事でもなくなり（選ばれた人のみでなく、ごく普通になり）ひとりでもまたは数人、グループなどでも学びを創りだせる人が多くなってきた。

が、このことを指し社会教育はもはや役にたたない、時代的役目はとうに終ったとし、むしろ自由選択のメニューと情報をとりそろえておくから、自分の財力にあわせ「自主的」に選び取って学んで欲しい。公的社会教育を解消させこれからは「生涯学習」の時代だ、というまたまたカネにもの言わす論調が広がり始めている。

しかし、よく考えてみたい。

パイプラインに象徴される強者優先の社会構造が長く続き、そんな中で社会的弱者もまた増大した。こども達、高齢者、障害をもつ人々、急増中の外国人……社会の中の中心的労働者もまた社会的弱者といわざるをえない。管理社会の中で己を見失い心身症が増え、不況のなかでのリストラにおびえ、不安な生活の中での神頼みや必要以上の保険加入など、尋常でない状況がいのちやくらしを取り巻いている。いまこそ本来的な社会教育が急務であるといわざるをえない。

この集会を機に「埼玉の社会教育96」を刊行した。いままでの社会教育の目幅をうんと広げないと見えない市民の活動が登場した。

教育といえば学校教育と思うほど戦後の学校教育のはたした重大な功績と、しかし近年みられるゆがみの中で、影のうすい社会教育といえども重大な今日的役割をせおった仕事として双方を位置付ける接着剤は、重鎮大田先生に実行委員長を引き受けていただいた集会として大きな意味があったと思う。